

アダム・スミスにおける

分配理論の形成とその意義

小 玉 佐 智 子

一、『諸国民の富』における分配理論の意義に関するキャンナンとスコットの見解

アダム・スミスの『諸国民の富』(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776)において、生産物の「分配」の問題がいかなる意義をもっているかということについては論議のあるところである。第一編の「労働の生産諸力における改善の諸原因について、また、その生産物が人民のさまざまな階級のあいだに自然に分配される秩序について」という表題からは、スミスが、分業論とともに分配の理論を第一編の中心論題となしているような印象をあたえられる。しかし例えばキャンナン(Cannan, E.)は、このような表題にもかかわらず、分配理論は「⁽¹⁾けっしてこの著作の本質的な部分ではなく、第一編第六章のわずか数パラグラフと他の数行とを削ればたやすく切りすてられる」ものであり、表題と内容は一致していないという見解を示しているのである。

スミスが第一編において、「分配する」(distribute)という語を使用して年生産物の分配に言及しているのは第六章

の以下の叙述である、――「あらゆる特定商品の価格、つまり交換価値が、これを個々別々にとってみれば、これらの三部分のどれか一つに、またはそのすべてにそれ自体を分解するように、あらゆる国の労働の年々の全生産物を組成しているいっさいの商品の価格もまた、これを複合的にみれば、同じ三部分にそれ自体を分解し、その国のさまざまな住民たちの労働の賃金、かれらの資財の利潤、またはかれらの土地の地代、のいずれかとして、かれらのあいだに分配 (parcel out) されなければならないのである。あらゆる社会の労働によって年々に収集または生産されるものの全体、またはこれと同一のことになるが、その全価格は、こういうしかたで、そのさまざまな成員のあるもののあいだに本源的に分配 (distribute) される。賃金・利潤および地代は、いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉であると同時に、いっさいの収入の三つの本源的な源泉である」(The Wealth of Nations [The Modern Library], Bk. 1, ch. vi, p. 52. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫・第一分冊一九五・六頁。なお以下の原典および邦訳の引用はこの版本による。)。ところでキャンナンは、この章句が「諸商品の価格の構成部分について」と題する第六章の中間に、単に価格理論のつけたしとして、もしくは価格理論から引き出された系論として書き加えられているにすぎないから、分配は第一編の主要な問題ではないと見なす。しかもこの章句のすぐ後に賃金・利潤・地代についての諸章が続いておらず、第七章では「諸商品の自然価格および市場価格について」論じ、第八章以降にそれらの章がおかれている。このことは、キャンナンによれば、右の章句が「いかに生産物が労働者・資本家・地主のあいだに分配されるか」を知ることに関心をもっていたからではなく、「賃金や利潤は商品の価格の原因であり、地代はその結果である」ということを明らかにするために述べられたものであることを物語るものである。そして表題に「生産物が人民のさまざまな階級のあいだに自然に分配される秩序について」と掲げながら、このように内容がそれに一致していない理由をキャンナンは次のように分析する。『諸国民の富』が公刊される六年前に、フランスにおいてチュルゴ

— (Turgot, A. R. J.) の『富の形成と分配についての省察』(Réflexions sur la formation et la distribution

des richesses, 1769—70) が公表されているが、スミスは「分配」という言葉の使用をチュルゴーからではなく、チュルゴー自身もそれから習得したところのケネー (Quesnay, F.) の表や体系から学んだと思われる。しかしスミスがフィジオクラットの理論に精通するようになる以前に、多分第一編は十中八九まで完成していた。その後、フィジオクラットたちと交友し、彼らの理論に精通するにおよんで、彼は、自分の価格理論や賃金・利潤および地代に関する観察はフィジオクラットが「分配」と呼ぶところの理論に相当すると考えるようになり、第一編にこのような表題を選ぶとともに、第六章の終りのほうで価格理論の中に右の分配論を挿入したのであろう、と。⁽³⁾

以上のキャンナンの主張の中で「講義」(Lectures) になかった分配理論が『諸国民の富』に加えられているのはフィジオクラットの影響によるという点については、周知のごとく、スコット (Scott, W. R.) によって異議が提起された。すなわちスコットの発見した『「諸国民の富」草稿』は『講義』の修正であり、スミスの渡仏以前に書かれたと推定されるが、すでにその中で『「講義」に見出されるよりもはるかに多くの分配論を含んでいることは疑いの余地がない』のであり、またその「分配を取扱った範囲は想像されている以上にはるかに大きく、そしてこれを取扱う場合の視野と洞察力は注目すべきものがある」とみられるのである。しかもスミスがこの時代のフィジオクラットの著作に精通していたということは彼と大学の蔵書状況から判断してありそうもない。したがって分配理論は本来フィジオクラットと関係なく、彼が独自に展開したものであると、スコットは主張する。そしてスコットのこの見解に従うと、当然『諸国民の富』における分配理論も、キャンナンの解するような「価格理論に後からつけたされた」、「たやすく切り捨てられる部分」という小さい意味のものではなくして、より本質的な意義をもつことになる。すなわちスコットは言う、「分配に関して、彼の初めの(草稿の—引用者) 企てはいかに富が生産されるにつれて分配されるかを示すことであった。後に、彼は、これがあまりに多くを憶測させるにまかせ、未だ説明されていない多くのことを含んでいると感じたにちがいない。その結果、『諸国民の富』の分配部分は価格とともに取扱われるようになった」と。⁽³⁾

そこで次に、スコットの発見した『草稿』の分配に関する叙述を、『諸国民の富』ならびに『講義』のそれとの比較において簡単に検討しておきたい。

- (1) E. Cannan, *Editor's Introduction to the Wealth of Nations* (The Modern Library), p. xxx ix. 大内兵衛・松川七郎訳・岩波文庫・第一分冊五〇頁。
- (2) E. Cannan, *A History of the Theory of Production and Distribution from 1776 to 1848*, London, 1898, reprinted in 1953, pp. 144—148.
- (3) W. R. Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, Glasgow, 1937, Part III, *An Early Draft of Part of the Wealth of Nations*, pp. 319—321.

二、『草稿』における分配論

『草稿』では、分配論は「社会の富裕の性質および原因について」と題する第二章に見出される。⁽¹⁾ スミスは、そこにおいて、分業が社会の富裕を増進させる原因であることを明らかにするために、文明国では生産物の分割 (division) が不平等であること、かつそれにもかかわらず最少の分け前にしかあずかれない最下層の人々にまでも富裕が行きわたっていることを主張する。そしてその不平等について、文明国では地主・高利貸・宮廷の従臣などの全く労働しない階層の人々が労働する人々よりも豊かに労働生産物を与えられているし、また労働する人々の間でも生産物の分割はその労働量に反比例的であると説明しているのである。

スミスのこの分配に関する論述について、スコットは「非常に明確な国民分配分および実質国民分配分の輪郭と概念があり、そしてピン製造の例において、これが『一つの大きな社会』の成員の間に分配されると考えられている。ただしこれ（大きな社会—引用者）は、説明の便宜上、十萬の家族から成ると見なされている。利潤と賃金との分割が見出されるし、地代は他の箇所回数述べられている」と評している。⁽²⁾

スコットがここで「国民分配分」あるいは「実質国民分配分」という用語を使っているのは適當でないが、社会の総生産物の種々な社会階層間における分配に関する概念が、この草稿の中に認められることは彼のいう通りである。

もっともこの点は、後に述べるように『講義』にもすでに認められる。またその分配が地代・利子・利潤・賃金という所得形成の過程を通じてなされることも、スミスはまだ不十分にではあるが、すでに理解していたと見なして差し支えないであろう。そしてとくに十八人の労働者が働くピン製造工場を例にとつて、各人の一日の生産物およびその価値が労働の賃金・工場主の利潤・原料費および道具の損耗費の三部分に分解することを論じた箇所は『諸国民の富』第六章へと發展させられたと見なし得るが、それに相当する論述は『講義』には見出せないし、しかも『諸国民の富』の価値論よりもむしろ明確で、すぐれているとも言える。ここではスミスは分解価値説の論理で一貫しているし、商品価値の原料・固定資本部分への分解を正しく認めているのである。

しかしそうであるからといって、『草稿』のこの分配論は『諸国民の富』における年生産物分配の理論と直ちに結びつくものではない。

まず『草稿』では、社会的な労働生産物分配に関しては、貧者と主君、小作人と地主、商人と高利貸、納税者と宮廷の従臣、番頭とその主人である商人、職人と番頭、労働者と職人とを比較し、それぞれの階級間もしくは身分間におけるその不平等を論じているのである。これと同じ趣旨の主張は『グラスゴウ大学講義』の中にも存在する。もっとも『講義』においては「富裕の分割」(division of opulence)という言葉が用いられているが、それは労働生産物の分配と同義に理解し得る。⁽³⁾ いずれにせよ、この分配の不平等論からは、スミスが『諸国民の富』におけるがごとく賃金・利潤・地代の基本的所得とその他の派生的所得とを明確に区別していたとは思われない。したがってまた文明社会の基本階級を労働者・資本家・地主の三大階級として把握してはいない。『草稿』においては先に述べたように『講義』になかったピンという特定商品の価値の分解に関するすぐれた叙述が見られるが、その特定商品価値の分解

と、社会の総生産物価値の分解との関連を気づくにいたっていないのである。かかる意味において、社会的な生産物の分配については『草稿』と『講義』との間にスコットのいうほど大きな、また本質的な変化があるとは認め難い。

また『草稿』の分配論において特に目立つのは、農業の階級関係を地主対農民 (peasant) として把握していることである。農民は労働者とともに文明社会の貧民階級と見なされ、「地代は全く農民の勤勉によって得られるものである」と述べている。これにたいし『諸国民の富』の地代は農業者 (farmer) が地主に支払う土地の使用料のことである。そしてその農業者というのは資本制借地農業者、すなわち「種子をとり、労働に支払い、家畜その他の営農用具を購入保全すべき資財を維持するのたりの額に、その近隣における農業資財の通常の利潤を加えた額」の分け前を土地の生産物から得る階級である (Bk. 1, ch. xi, p. 144. 邦訳第二分冊七頁)。もっとも『草稿』においても農業者という用語は散見し得るし、また労働者 (labourer) についてはその仕事を「土と季節と戦う」と表現しているから主に農業労働者を意味しているものと理解される。⁽⁹⁾しかし右に述べたところから、『草稿』の地代および地主・借地人の概念が『諸国民の富』のそれに比べてはるかに前期的な内容をもつことは明らかである。そしてこの両者の間の差異がもつ意味は大きい。『諸国民の富』においては、スミスは当時成立しつつあった「産業資本」の範疇を、工業よりもむしろ農業についてより適確に把握しているとみられるからである。かくしてスミスにあって、産業資本を中心とする経済循環の一過程としての分配の問題は、『諸国民の富』においてはじめて取り上げられることになったと云い得るのである。

そのほか『草稿』の分配論においては「年生産物」の概念がみられないこと、産業利潤と商業利潤との区別が不明確であること、賃金は単に労働生産物のうちの利潤と費用を控除した残余部分にすぎぬようであること等、多くの点で『諸国民の富』の年生産物分配の理論の間に大きなへだたりが存在するのである。

(1) スコットが『草稿』の中の分配を取扱った範圍と云っているのは次の二つの箇所を指すと思われる。前者は社会の總生産物の各階層・身分間への分配について、後者は特定生産物の価値の分解について述べたものである。

① 社会の總生産物の分配に關して

「文明社会において、富者や権力者が、生活の便益品と必需品を、未開の孤立国においていかなる人が自給できるよりも、もっとよく供給される理由を説明することはさほど困難ではあり得ない。いつでも自分自身の目的のために何千人もの労働を指図し得る人が、自分自身の勤勉だけに頼っている人よりも、自分の必要とするものを何でもよりよく供給されると想像することはきわめて容易である。しかし労働者や農民も同様によりよく供給されるということがどうして生じるかは、多分そのように容易には理解されない。文明社会においては、貧民は自分たち自身と、非常に贅沢な自分たちの支配者の両方にたいして供給する。地代は怠惰な地主の虚栄を維持するのに役立っているが、すべて農民の勤勉によって得られるのである。金持ちは、自分の資本を利子つきで貸し与える卸商人や小売商人を犠牲にして、あらゆる種類の下品で卑しい快楽にふける。怠惰で浮薄な宮廷の從臣たちもすべて同様に、彼らを支える税金を支払う者の労働によって衣食住を与えられている。その反対に、未開人の間では、各人は自分自身の勤勉の全生産物を享受するのである。彼らの間には地主も、高利貸も、収税吏もない。それ故に吾々は、もし経験がその反対のことを示しているのでなかったならば、当然次のように期待するであらう。すなわち彼らの間では全ての個人は、文明社会における下層階級の人々が所有し得るよりもはるかにより豊富な生活の必需品と便益品を有するであらう、と。

……しかし、一つの大きな社会の労働の生産物については公正かつ平等な配分 (division) というようなことは決して存在しない。十万の家族を有する社会においては、おそらく、全く労働しない家族が百はあり、そしてこれらの家族はその上に暴力によるか、より規則正しく法律の圧力によって、その社会における他のいかなる一万の家族よりも、その社会の労働のより大きな部分を使用している。この莫大な私消のあとに残っているものの配分もまた決して各個人の労働に比例してなされないものである。反対に、最も多く労働する者が最も少なくもらうのである。富裕な卸売商人は、奢侈や接待に自分の時間の大部分を費しているが、実務をしている番頭や会計係のすべてよりも、その商売の利潤のうちはるかにより大きな分け前を受けている。さらにこれらの最

後に挙げた人たちもかなりの余暇をもち、出勤しなければならぬという束縛のほかには殆んど何らの苦痛もこうむらないのであるが、彼らの指図のもとにずっと激しくたゆみなく働く職人の同数の人たちよりも三倍以上の生産物の分け前を受けている。さらに職人は一般に屋根の下で、風雨の危害から保護され、気楽に、また多くの便利な機械に助けられて働いているのであるが、貧しい労働者よりもずっと大きな分け前を受けているのである。彼ら貧しい労働者は土や季節という戦いの相手をもち、また共同社会のすべての他の成員の奢侈を充たすために原料を供給して、いわば人間社会という建造物全体をその双肩に支えているのに、彼自身はその重みによって地下に押しこめられ、建物の最底の土台部に見えないように埋められてしまっていると思われる。そのような酷い不平等のただ中において、文明社会のこの最下層の最もさげすまれた成員でさえ、最も尊敬されかつ活動的な未開人の到達し得るところと比べて、よりまさった豊富さと潤沢さを一般に有しているのを吾々はどういふに説明すべきであるか。」 — An

Early Draft of the Wealth of Nations, in W. R. Scott, Adam Smith as Student and Professor, pp. 325—328.

② 特定生産物の価値の分解に関して

「分業の結果として各種の技術による生産が大いに増加したために、文明社会においては、財産の不平等にもかかわらず、その人民の最下層にまで行きわたった一般的富裕が生じたのである。……例えば私が前に示した実例に戻り、ピンが百本につき一ペニーと評価されるとしよう。それはある種類のピンの価格に近いものである。前の想定によると、ピン製造者(pinner)は一日に二千本のピンを作ると考えられ得たので、二〇ペンスの値打ちの製品を生産することになる。五ペンスが針金の価格、道具の損耗、工場主の利潤として差し引かれると、職人の賃金として十五ペンス残り、それでもって彼はすべての生活必需品と便益品を購入することになる。このことは、彼が、自分の主人には針金と道具と仕事とを与えてくれたことにたいし五百本のピンを与え、自分自身は千五百本のピンを自分が必要とする他の技術の生産物と交換するために取っておく、というのとちょうど同じである。ただし富裕に関しては、吾々は、個人が特定商品を所有していることと考えても、特定商品の価値を所有していることと考えても同じことである。なおいっそう分業と技術の改良が進んで、ピン製造者は一日に四千本のピンを生産するようになり得たとしよう。この

場合にはピンは前より四分の一低く評価されて百本につき三ファージングで売られるようになるけれども、職人は一日に三十ペンスに値する製品を生産するであろう。彼の主人は利潤と費用として十ペンス、あるいは一三三本のピンを受け取り、職人は二十ペンス、もしくは二六六七本のピンをその賃金として保有する。製品の価格は低下し、労働者の分配分である賃金は増加するであろう。公衆はよりよく供給され、職工はより十分に報われるであろう。」——*ibid.*, p. 331. なお、ピン製造者はここでは一ピン工場で働く十八人の職人の中の一人と解されるのであって、事業主ではない。

(2) W. R. Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, p. 320.

(3) *Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, delivered in the University of Glasgow by Adam Smith, ed. by E. Cannan, Oxford, 1896, pp. 162-163.* 高島善哉・水田洋訳「グラスゴウ大学講義」昭和二十二年・日本評論社三三—三四頁。なおスミスは同書で「一国民の富裕は通貨の量には存しないで、生活に必要な諸商品の潤沢なことに存する」と述べている (*ibid.*, p. 192. 邦訳三六六頁)。したがって富裕の分割というのは生産された消費財の分割＝分配の意味に解される。

(4) 『諸国民の富』でも、労働者の概念には農業労働者を中心に、炭鉱夫・石炭仲仕などが含まれている、——拙稿「スミスの賃金論における Master と Labourer」(神戸女学院大学論集第十四巻第一号)。

三、『諸国民の富』における分配理論の意義

以上に述べたところから、『諸国民の富』における年生産物の分配論は『草稿』のそれから形成・発展させられたものであるとは言い難い。それではキャンナの言うごとく、スミスはフィジオクラットからそれを学び、すでに完成した体系の中に数行の文章で書き加えたにすぎないのであろうか。

さて、スミスは第一編第一章の結論の中でふたたび「あらゆる国の土地および労働の年々の全生産物、またはこれと同一のことになるが、この年々の生産物の全価格は、すでに述べたように、自然にそれ自体を土地の地代と、労働

の賃金と、資財の利潤との三部分に分割し(divide itself)、人民の三つの異なる階級、つまり地代で生活する人々と、賃金で生活する人々と、利潤で生活する人々との収入を構成してゐる」と言つてゐる (Bk. I, ch. xi, p. 246. 邦訳第二分冊二一六—七頁)。そしてさらに注目されねばならないのは第二編第二章の冒頭の叙述である。すなわち「第一編では、大部分の商品の価格はそれ自体を三つの部分に分解し、その一つは商品を生産してこれを市場へもたらすのに使用された労働の賃金を支払い、もう一つはこれに使用された資財の利潤を支払い、第三はこれに使用された土地の地代を支払う、ということが明らかにされ、また、……あらゆる商品の価格は、これらの三部分のいずれか一つに、またはそのすべてにそれ自体を分解しなければならない、ということも明らかにされたのである。すでに述べたように、あらゆる特定商品を個々別々にとつて見れば以上は事実なのであるから、あらゆる国の土地および労働の年々の全生産物を構成するいっさいの商品を集合的にとつて見ても、以上は事実であるにちがいない。この年々の生産物の全価格、つまり交換価値は、それ自体を同じ三部分に分解しなければならないし、またその国のさまざまの住民のあいだに、その労働の賃金か、その資財の利潤か、またはその土地の地代か、のいずれかとして分配され(parcel out) なければならぬのである」と述ぶ (Bk. II, ch. II, p. 270. 邦訳第二分冊二四九頁、傍点は引用者)、続いて一国の年生産物について総収入と純収入を区別してゐるのである。

このように、第一編第六章の分配の章句と同じ趣旨の叙述が繰返されてゐるということ自体、スミスがキャンナのいうように「賃金や利潤は商品の価格の原因であり、地代はその結果である」と結論するためにのみこれを述べたのではないことを示している。ところで、右の第二編からの引用文中の傍点を付した部分は、原文では、先に引用した第一編第六章の章句の前半の部分と全く同文である。この二つの分配に関する同文の箇所は、編を異にし、その間に膨大な紙数をはさんでいるが、おそらくほぼ同じ時点で、あるいはいずれか一方が他方を基にして書かれたものであらうと思われる。そうであるとするならば、スミスは再生産や蓄積、ならびに総収入と純収入の区別や生産的労働と

不生産的労働の区別を問題とする中で、一国の年生産物の分配について彼自身の概念を作り上げたのであり、その結果、第一編にも『講義』にはなかった分配理論を挿入する必要があるにいたったと解されるのである。何故なら、彼は右に引用したごとく、第二編第二章の冒頭において「第一編では商品の価格は賃金・利潤・地代の三部分に分解するということを明らかにした」と述べ、「また年生産物の住民のあいだへの分配について明らかにした」とはいいない。さらにスミスはフィジオクラットの著作や彼らとの交友を通じて分配について学ぶところが大きであったが、同時に、広く認められているごとく、再生産や蓄積の問題を把握する上にも彼らから深い影響をうけたのであり、そしてこの両者、すなわち年生産物の分配と再生産・蓄積とは密接不可分離の関係にある。したがって論理的にも、年生産物分配の概念は再生産ならびに蓄積について考察し理論化する中で形成され、またそれに基づいて再生産論・蓄積論が展開されたと見るのが妥当であろう。

キャンナの主張するように、スミスは分配についてフィジオクラットから学ぶところが多かったのであり、また第一編における分配の章句はそれによって後から挿入されたものである。しかし彼はそのフィジオクラットから得た年生産物の分配概念を直接、あるいは自己の体系の中に消化しないで、第一編の価格理論に断片的に書き加えたのではない。このように考えるならば、『諸国民の富』における分配理論の意義は自ら明らかである。

ところで第一編だけについて見るならば、分配理論はいかなる意義をもつてであろうか。スミスは何故に第一編を「生産物が人民のさまざまな階級のあいだに分配される秩序について」と題したのであろうか。先に述べたキャンナの論理にしたがうと、次のようになる、――第一編の価格論・賃金論・利潤論・地代論等はスミスが第六章に年生産物の分配に関する章句を挿入する以前に、つまりフィジオクラットと交友してその分配理論に精通するようになる以前に完成していた、彼が「分配」の用語を知らずに書いたのであるから、それらの諸章は分配論ではなく、第一編の内容は表題に一致していない、と。しかしこのキャンナの論理は形式的にすぎる。用語を知ると、書いたのと、どち

らが早く、どちらが後であったかということだけで、そのような断定はなし得ない。

まず『諸国民の富』の「序論および本書の構想」において、スミスは第一編にその表題の事柄を主題として取り扱う理由を次のように説明している。「狩猟民や漁労民という野蛮民族のあいだでは、働きうるあらゆる個人は有用な労働に多少とも従事している」が、「このような民族はみじめにも貧乏なのである」、「これに反して、文明で盛大な諸国民のあいだでは、たとえ人民の多数はまったく労働せず、その多くは働く人々の大部分にくらべて十倍、否しば百倍もの労働生産物を消費するにもかかわらず、社会の全労働の生産物はなおきわめて大であるから、すべての人はしばしば潤沢に供給され、最下最貧の階級の職人でさえ、もしかたが俸約で勤勉であるならば、どのような野蛮人が獲得しうるよりも多くの必需品および便益品の分けまえを享受しうるほどである」(Introduction and Plan of the Work, p. Iiii, 邦訳九一頁)と。ところでこれと同じ趣旨の論述は前節で考察したごとく『草稿』に見出されるし、さらにその『草稿』の論述の源は『講義』に発している。すなわちスミスの分業論は、本来「富裕を増進するのは分業である」という生産力増進論と、その主張を裏づけるところの、「分業の発達した富裕国では生産物の分配は不平等であり、労働者はその生産物を労働しない階級と分割するが、労働者の賃金も未開国の人々よりも高い」という分配不平等論の二つの主張から成っていたのである。しかるに『諸国民の富』においてはこの後者の主張が分業論から殆んど除かれて、第六章ならびに第八章以下の諸章に独立して発展させられ、前者の分業に基づく生産力増進論とともに第一編の主題を構成することとなったのである。つまり『講義』および『草稿』における分業論の命題が第一編全体に拡大されたと言い得よう。したがって第一編の表題に見られる distribute の語は、第六章における年生産物の分配論と厳密に対応するものではなくして、従来スミス自身が divide の語をもって表現してきたところと同じ意味であり、ただ用語を変えたにすぎないという見方も出来るのである。

さらにこの問題に関して見落してはならないのは、スミスが『草稿』においてペンという特定生産物の価値の分解

を、一本のピンではなく、一人の労働者が一日に生産した二千本もしくは四千本のピンについて論じていることである（本稿八―九頁）。この論述の中に、いわば「日生産物の分配」ともいふべき分配概念を見出す。彼はここで年々の生産物に代うるに一日の生産物をもって、それが賃金ならびに利潤として労働者ならびに資本家のあいだに分配されることを明らかに看取しているのである。前節で述べたごとく、この『草稿』のピンの価値分解論は『諸国民の富』第六章の商品の価格の構成および分解の理論に発展したと考え得るが、『諸国民の富』においては、それは労働者の一日の生産物ではなく、一個もしくは一単位の商品の価値について展開されている。これは価値論の立場からは一つの大なる進歩である。しかしこの進歩によって『諸国民の富』では『草稿』の中にあつた「日生産物の分配」に関する概念が消失してしまう。そしてこの価値・価格理論の後に賃金・利潤・地代に関する諸章が続くから、『諸国民の富』の後半の諸章全体が、キャンナの主張するように、分配論ではなくして、価格理論であるかのごとき外観を呈するようになったのである。けれどもスミスは、右に見たごとく、すでに『草稿』において日生産物の分配について論じていた。この事實は、スミスが未だフィジオクラットから年生産物の分配に関して学んでいなかった段階においても、分配範疇として賃金や利潤を考察し待る可能性をもっていたことを意味する。そしてこのように推論するならば、第一編がほぼ完成した後、スミスが第六章の価格理論の中に年生産物の分配理論を挿入したのは重要な意味があったと考えられるし、また第一編の表題に分配を掲げているのも当然のことと理解されるのである。

The Formation and the Significance of Adam Smith's Theory of Distribution

Résumé

Professor Cannan says that the main outline of Part I of "The Wealth of Nations" was ready before he had an opportunity of acquiring any considerable knowledge of physiocracy and that the scheme of distribution, however, was wholly absent. According to his view, therefore, it was from the Physiocrats that Smith acquired the idea of necessity of a scheme of distribution.

Professor Scott argues on the other hand that "An Early Draft of Part of the Wealth of Nations" which was dated before Adam Smith went to France, contained much more on distribution than the summary by Cannan suggests.

This essay aims to define the extent of influence of physiocracy on Smith's theory of distribution and to clarify the formation and the significance of his theory.